

室町期における地域権力と大藏経

貝 英 幸

はじめに

室町期の政治権力による大藏経の請来は、わが国仏教史上の重要事項として、あるいは海外からの經典請来という観点から対外交渉史の分野において、これまで数多くの研究がなされてきた。大藏経請来を扱った研究は既に戦前から行われており、研究の方向も多岐に及んでいる。⁽¹⁾

今試みに、それら藏経請来の研究を大まかに分けてみると、その方向には二つの大きな流れがあるように思う。一つは高麗版大藏経を中心とする良好なる經典のわが国への移入という視点であり、今ひとつは日本と朝鮮との交渉過程において渡海した物品としての大藏経という視点である。

前者は、わが国へもたらされた經典、室町期においては多く

の場合高麗版大藏経を指すが、それ自体が優秀なるテキストとしての性格を有しているところから、善本の伝来およびその経過を考えると、書誌的な性格が強いものといえる。

一方、後者はというと、室町期における日本と朝鮮との関係の中で、両国間の如何なる交渉によつて大藏経がわが国へもたらされたのかを考えようとするものである。いうなれば日本からの渡海者の最大の要求品目である大藏経を通して、当該期の両国間の関係、更にはわが国の対外交渉を考えるものであらう。ところで、こうした大藏経についての先学の研究を概観する時、わが国の諸方が如何なる理由によつて大藏経を請来しようとしたのかという請来の目的については、余り顧みられてこなかったように思う。

周知のように、わが国における大藏経は、古代律令政治の段

階においては天皇による書写事業を中心としつつも、中世以降、とりわけ室町期以降は高麗版大蔵経の輸入に頼ったと説明される。そしてその理由としては、丸亀金作氏が「高麗の大蔵経と越後安国寺とについて」のなかで、わが国への高麗版大蔵経請来の目的を「幕府をはじめ、諸国の大名達は、朝鮮国にある大蔵経を将来して佛教の興隆に資し、その加護によりたいという願望をもっていた」と述べた⁽²⁾とき理解に基づいていると思われるのである。

すなわち大蔵経の請来は、幕府や守護など仏教の発展に心を寄せる武家が行ったものであり、興隆や保護など仏教に対する信仰心がその根底にあるという理解である。当該期、幕府はじめ地域権力は、禪宗に強い関心を抱き禪寺を建立、またその禪寺には五山僧に代表される高僧が招来されたが、こうした幕府および地域権力による禪宗との関わりについても、武家による禪宗への強い関心、禪宗への傾倒で語られることが多い。大蔵経請来の推進者が幕府や地域権力であり、かつ実質的な渡航者が禪僧であることも手伝って、大蔵経の請来もこうした武家の禪宗への傾倒と同一線上に理解されているものとみてよい。

ところで、以前私は、応仁文明の乱後の幕府および大内氏の対外交渉実務について検討したことがある⁽³⁾。そこでは、対外交渉の実務において禪僧達が重要な役割を果たすとともに、幕府

や地域権力が彼ら禪僧に依存することによって交渉を行いえていた事を指摘した。対外交渉はそれ自体が政治的性格の強いものであり、その実務のプロセスも当然政治性を帯びることとなる。そして実務に携わる者は、否応なしにそうした政治性に触れることとなるわけで、そこでの実務担当者は、まさに外交官僚であった。例えば交渉実務を禪僧が担うからといって、当該期の実務や交渉を、武家と禪僧の一般的な関係に集約してしまうことは、当該期の対外交渉のありようを見誤ることにつながるのとは明らかである。そしてこうした問題は蔵経請来に関しても同様のことがいえるのである。

もちろん高麗版大蔵経は、それ自身優良な經典の集成であり、「良好なるテキストにて学修を行いたい」という考えは当然存在したであろう。そして請来された大蔵経自体についての理解を深化させるという点から考えれば、こうした視点に基づく考察も重要である。しかし問題なのは、そうした視点が、大蔵経請来に関わった全ての階層に等しく共通のものであるかどうかという点である。かかる視点は、經典を利用する僧侶たちのものであって、請来の主体となった幕府や大名達と同一のものとはいえないのではないだろうか。蔵経請来の主体となった幕府や地域権力には、おそらく高麗版大蔵経に良好なテキストという概念とは全く別のものが存在しただろう。そしてそれこそが、

幕府や地域権力間において政治的な駆け引きがおこなわれ、入手を試みていることについて何らかの示唆を与えてくれるのではないだろうか。

本稿では、こうした視点に基づき、請来された大藏経の政治的な利用について考えてみたい。もちろん、一口に大藏経の政治的な利用といっても、その内容は多岐におよび一様ではない。地域権力が領国統治に利用するのも政治的な利用の一形態であろうし、幕府が地域権力との関わりのなかで大藏経を用いる、あるいは逆に地域権力が幕府との交渉の過程で用いるのも政治的な利用である。本稿では、地域権力の領国統治への利用、権力間の交渉過程での利用という二つの面から藏経利用のありようを考えることとし、室町期多くの大藏経を輸入した大内氏を例に検討する。

大藏経の請来と勧進

藏経の政治的な利用といった場合、まず想起されるのは、地域権力が自らの領国内に寺社を建立し、そこに藏経を安置するような例であろう。そもそも領国内寺社へ經典を奉納することは、地域権力にとつての宗教と政治の関係を考える場合の典型と理解される。寺社への藏経安置についても同様に考えられて

おり、そうした視点に基づいた研究も多い。ただ、はじめにも述べたように、地域権力による寺社の造営は、往々にして地域権力の個人的な信仰に基づくものと解されるが、それとて実際は領国統治の一環であり政治性の色濃い事象である。したがって寺社への藏経の請来・安置も、地域権力の単なる個人的な信仰と解すべきではなく、領国をいかに統治するかという、地域権力が直面した政治的な課題を解決する手段として、準備された可能性が高いとみるべきであろう。よってその理解には領国内の大藏経は如何なる理由でそこに安置され、どのように利用されたのかという視点が必要となる。

さて大内氏は、長享二年（一四八八）の時点で、領国内に相当数の大藏経を有していたことが知られる。『蔭涼軒日録』では、大内氏の在京雜掌である東周興文によつて、大内氏が所持する大藏経は十三藏とも、あるいは八藏とも語られている。この問題に関しては後述するためここでは詳しくは触れないが、大内政弘の晩年にあたる長享二年頃、大内氏領国内には、少なくとも八藏を超える大藏経が藏されていたという事実は、藏経の請来が大内氏の単なる個人的な関心事のレベルで理解しうるような問題とは異なり、やはり領国支配など大内氏の政治全般との関わりの中でその意味を考えることが必要であろう。ところで、当時大内氏領国に藏されていた多くの大藏経は、

政弘自身がその全てを請求したものでないことはいうまでもない。大内氏が、室町時代の初めより積極的に大藏経の請求を行ったことは夙に知られる事実であるが、そうした長期に渡る請求活動は領国内に複数の、しかも相当数の大藏経を蔵させることとなっていた。

そこで当然問題となるのは、大内氏はこうした複数の大藏経を如何なる目的で所持していたのか、という点である。

大内氏の歴代当主のなかで、最も早くより、かつ積極的に大藏経の請求を行ったのは大内盛見である。盛見は、兄大内義弘が応永の乱で敗死した後、幕府の援助をうけた弟弘茂が周防・長門両国を安堵される中、応永十年（一四〇三）に弘茂を破り周防・長門を安堵され、自らの力で当主となった。盛見は応永十四年より四度大藏経を請求しているが、特に応永十四年から十六年にかけては、連続した請求を行っている。⁽⁴⁾

そのうち応永十四年に行われた請求を見てみると、

氷上山興隆寺一切経藏供養条々

一願文

為大概先年本堂供養願文写進之、料紙ハ表裏〇（以）

金銀薄被艶畢、

一藏経船出津応永拾四年卯月日、帰朝同十一月日、衆人無

為海上無事、

一翌年自朝鮮国、両官人為礼来朝之、

一毎年二季彼岸転経事、

一当寺毎年二月舞樂事、

一供養吉日良辰事、

三月下旬卯月上旬之間可被選下事、⁽⁵⁾

とあり、この時の請求が、大内氏の氏寺である氷上山興隆寺へ安置するためのものであったことがわかる。

興隆寺は、南北朝内乱期の暦応四年（一三四一）に一族の内訌によつて焼失したが、貞和五年（一三四九）より本堂の再建が行われ、応永十一年には再建なった本堂で供養が行われ⁽⁶⁾。右の史料にある「経藏供養」は、同寺再建事業の一環として本堂供養に続き行われたと考えられるから、藏経請求もそうした再建事業の延長線上にあるものと理解してよい。

しかしながら、この時の藏経請求で注目できるのは、請求が勧進の形態をとって行われている点である。

興隆寺一切経勧進帳国清寺殿盛見公判

壹万正

散位多々良朝臣判

千正

目代殿惣瑞判

貳百正

法泉寺道朴判

千正

馬場殿満世判

阿幸丸判

百疋	一玄判
奉加	新介
三百疋	新寺大坊朝尊判
三百疋	氷上大坊宥信判
貳百疋	問田入道道珠判
二千疋未進十貫文	杉彈正忠重貞判
千疋未進五貫文	陶宮内少輔宣顯判
二千疋〔未進十貫文〕	陶三郎盛長判
千疋〔未進五貫文〕	杉駿河守重宣判
二千疋未進十五貫文	鷲頭道祖千代丸判
貳百疋	安富太夫入道永選判
三百疋	沓屋常刀左衛門尉成重判
二百疋壹貫文正月廿八日進之	中村良阿判
三百疋	杉十郎重村判
三百疋	杉三郎重茂判
貳千疋未進十貫文	杉伯耆守重綱判

(以下略)

右の史料は、先の応永十四年の藏経請求に際して行われた勸進の内容を記した「勸進帳」である。史料は長文に及ぶため、ここではその一部のみを掲げたが、記載の形式は、当主盛見に続き、以下奉加者が奉加の金額と共に記され、奉加者は、当主

盛見を除き、奉加疋数の記されていない新介を加えると総計で八四名に及んでいる。奉加者個々についての記載は、上から順に奉加の疋数、家名・官途名・実名、そして花押と続き、これらが一行に記されている。次に奉加者の記載順はというと、勸進の主催者たる当主盛見が最初に記されていること以外は奉加者・奉加疋数いずれをもとに考えても、特別な順序に基づいているとは思われない。このため考察の便宜上、「勸進帳」を表化し、奉加金額順に並び替えてみたのが表1である。

さて、奉加帳を表化し改めて奉加の内容を検討してみると、そこからはいくつかの興味深い事柄がうかがえる。

まず奉加者について、奉加を行ったのは氷上山興隆寺、国衙在庁関係者および大内氏家臣に限られており、興隆寺は各坊が百疋づつ、大内氏家臣は、各人が百疋から二千疋を奉加している。そして奉加の疋数は、興隆寺の各坊は百疋均等の奉加であるのでひとまずおいておくとして、大内氏家臣の奉加の疋数は、全ての奉加者の素性が判明するわけではないとはいえ、家臣団と奉加の関係から家臣団内部の序列のうかがわせるいくつかの可能性が指摘できる。

たとえば、当主盛見以外の奉加者のなかで、最高額の奉加を行っているのは陶盛長・杉重貞・杉重綱・鷲頭道祖千世丸の四名で、彼らは二千疋を奉加している。そのうち杉重貞・重綱の

表1 応永14年興隆寺大藏經勸進人別表

家名	官途/法名	実名	奉加正数	貫数	未進分	家名	官途/法名	実名	奉加正数	貫数	未進分
大内	三郎	盛見	10000	100		岡部	左衛門大夫	貞景	100	1	0.5
陶	彈正忠	盛長	2000	20	10	河内	左衛門大夫	義忠	100	1	
杉	伯耆守	重貞	2000	20	10	沓屋	六郎左衛門	昌西	100	1	
鷺津		綱祖	2000	20	10	古曾	河内入道	道貞	100	1	0.5
仁保	次郎	重頼	1000	10		白松	兵部少輔	和基	100	1	
陶	宮内少輔	宣顕	1000	10	5	白松	縫殿允	道定	100	1	
杉	駿河守	宣宣	1000	10	5	杉	大藏入道	基道	100	1	
豊田	民部少輔	儀種	1000	10		杉	但馬守	重尚	100	1	
内藤	大和守	義盛	1000	10		高石	新左衛門尉	宣重	100	1	
安富	大藏大輔	弘貞	1000	10		恆富	兵庫助	重治	100	1	
	目代	惣範	1000	10		奈良	準人佑	頼重	100	1	
	馬場殿	瑞世	1000	10		仁保	修理亮	重勝	100	1	
沓屋	石見守	重成	500	5		野田	勘解由	弘安	100	1	
波多	孫十郎	忠明	500	5		幡生	左馬助	忠本	100	1	
三和	藏人入道	重實	500	5	3.5	弘中	九郎次郎	兼綱	100	1	
由利	若狹守	尚詮	500	5	2	弘中	七郎右衛門	信政	100	1	
沓屋	伊豆守	成重	300	3	3	弘中	尉	兼助	100	1	
	帶刀左衛門				1	弘中	源左衛門入	重綱	100	1	
杉	尉	重村	300	3		弘中	藏人	道祖	100	1	
杉	十郎	範安	300	3		弘中	雅樂助	丸信	100	1	
杉	四郎	重茂	300	3		弘中	左馬允	昌清	100	1	
杉	三郎	重治	300	3		弘中	四郎右衛門	浩然	100	1	
仁保	掃部助	重幸	300	3		弘中	入道	頼永	100	1	
弘中	新右衛門尉	兼實	300	3		右田	石見守	重愍	100	1	
弘中	民部丞	兼連	300	3	1	右田	越後入道	源英	100	1	
右田	勘解由左衛					宮内	入道	源英	100	1	
	門尉	虎法師	300	3		宮河	大炊助	源英	100	1	
來原	次郎左衛門	盛氏	300	3		宮利	下総守	源英	100	1	
	尉					毛森	勘解由入道	源英	100	1	
	新寺大坊	尊信	300	3		山田	三郎兵衛尉	源英	100	1	
都野	氷上大坊	宥昌	300	3		吉見	治部少輔	源英	100	1	
問田	兵庫入道	益珠	200	2	1			源英	100	1	
中村	入道	良阿	200	2				源英	100	1	
弘中	縫殿入道	喜快	200	2	1			源英	100	1	
安富	太夫入道	永朴	200	2				源英	100	1	
	法泉寺	秀清	100	1				源英	100	1	
伊佐	掃部助	宣清	100	1				源英	100	1	
宇野	彌七	宣清	100	1				源英	100	1	
宇野	筑前守	四郎	100	1				源英	100	1	
江木	入道	慈源	100	1				源英	100	1	
江口	入道		100	1				源英	100	1	
大田	入道		100	1				源英	100	1	
								新介			
								小計	38900	389	68.5

両名は、それぞれ筑前国守護代・豊前国守護代。陶盛長および鷲津道祖千代丸の両名は共に大内氏一門で、一門中でも特に当主に近しい「親族家頼」に分類される。また陶盛長自身は長門小守護代に、息男盛政が長門守護代に補されており、もう一方の鷲頭氏が周防に拠点を置いていることを勘案すれば、彼ら四名は家臣団における重臣であると共に、当時の大内氏領国を形成する諸国の守護代クラスと見てよい。

次に高額の奉加を行ったのは、千疋を拠出した仁保重頼以下九名である。彼ら千疋拠出者は多彩な顔ぶれで、大内氏一門である陶宣顯・安富弘範などの他、周防国衛目代である乗律坊惣瑞⁽⁸⁾や、後の盛見没後の家督争いの際には持盛方につき自刃する大内満世、元は大内氏の対抗勢力で長門厚東氏配下であった豊田氏、盛見の代に家臣団に加わった内藤盛貞など、奉加の正数に比してその臣従の度合いが必ずしも明確ではない者が多く含まれている。『大内氏史研究』⁽⁹⁾では、この勧進時点での内藤盛貞および仁保重頼の奉加への参加を重視しているが、奉加千疋を行ったのは家臣団以外の周防国衛目代、および一門内部の守護代に続くクラス、そして家臣団とはいえ直近に帰順し家臣団に加わった者など大内氏にとって重要な存在の者と考えられる。

領国統治と大蔵経

さて、この勧進帳には、今ひとつ注意すべき点が存在する。それはこの勧進が勧進帳記載の通りに進められていない可能性が高く、勧進帳に記された奉加金は、その全てが拠出されたのではないという点である。⁽¹⁰⁾

本勧進帳における記載は、先にも述べたように、奉加正数・署判の順で、奉加者一人が一行に記される形式となっている。勧進帳を詳しく見てみると、正数を記した下部には、所々に「未進」の注記があり、具体的な未進額が記されている他、奉加正数の右肩部には合点が入れられている行もある。また、奉加者署判の部分には花押のないものもみられる。署判および合点・未進の記載はそれぞれ別個に記されたようで、それらの間に関連性はみられないが、未進の記載がみられる者はいずれも大内氏家臣に限られており、そこからは次のように理解することができよう。

そもそもこの勧進は、『注進案』に「蔵経勧進につきて分国中へ廻らし文あり⁽¹¹⁾」とあるように、勧進帳が領国内を廻り、奉加を募るという形で進められた。その際勧進帳には、

氷上山興隆寺蔵経勧進事、各奉加尤可然候、恐々謹言

八月廿一日

盛見御判

長門国人々御中

という、当主盛見の判物が添えられていた。右の史料は長門国人々宛だが、領国全てに対して同様の文書が発給されたのである。したがってこの勸進は、勸進帳の先頭に当主盛見が加判し、壹万疋という奉加疋数が記された後、帳面がそれぞれの家臣中を廻る形式で進められたとみてよい。

大内氏領国での勸進としては後の例ではあるが、文明十年（一四七八）十月、太宰府観世音寺の奉加に際して留守職房顕が大内政弘の許を訪れ、「奉加帳築山殿御判」を要請した例があるが、この勸進もそうした例と類似した方式であったと思われる。ただ、観世音寺の勸進における政弘の御判は、同寺による伽藍の復興費用捻出活動をより円滑に進めるため、北部九州において勢力が大きい大内氏当主の御判を得ることが期待された例であるのに対し、この勸進の場合は、当主が加判した勸進帳が家臣中を廻るということに意味があったものと思われる。勸進に際して奉加者は、本人自らが一行全てを記すのではなく、既に自らの名前が記された行に、花押を据え奉加金を拠出することにより、勸進への賛同の意志確認がなされたと思われる。もちろん実際には、花押は据えたものの奉加金を帳面に記された疋数に従い全額拠出しない者、あるいは勸進への賛同自体を留保した者がいたことは容易に推察できる。先に勸進帳には

合点や未進の記載があることを述べたがその記載こそ、そうした者の存在ゆえのものであったと思われるのである。帳面の奉加疋数と拠出金が合致しない者には合点が入られ、あるいは疋数の不足について「未進」と記載され、具体的な未進引数が書き込まれる。また賛同そのものを留保した者の行には判が据えられないこととなる。

そこで未進について、今少し詳細に見てみよう。勸進帳において未進の注記がなされている者はその数十五名、全員が大内氏家臣である。これは奉加を行った家臣団の約二割に当たる。また未進の金額は総計で六八貫五〇〇文で、これは奉加全体でみれば約二割にしか過ぎないが、家臣団が拠出した金額の合計二五一貫文と比すならば、四割弱にも及ぶこととなる。家臣団からの奉加は必ずしも奉加帳通りに進められていないわけである。とりわけ二千疋づつを奉加した守護代クラス四名は全員に未進の記載が見られるばかりか、驚頭道祖千代丸に至っては花押も据えられておらず、奉加疋数二千疋のうち四分の三にあたる千五百疋を未進し、奉加したのはわずかに五百疋のみという状況である。このほか未進者の特徴としては、帳面に記された疋数の半額を未進した者が多くみられる。

こうしたことから考えるならば、奉加帳にあらかじめ記されている疋数は、いわば当主側によって設定された疋数であって、

実際には家臣団はその全額を拠出することは困難であったと思われる。そしてこの勸進の実態は、記載された正数から未進分を減じたものであったと考えられるのである。こうした状況を、家臣団の経済的な問題とみるのか、あるいは奉加そのものに対する意志の表れとみるのかで評価が分かれるところであるが、少なくともこの勸進は、勸進帳の記載通りには果たせておらず単に勸進帳の記載のみを以てこの勸進の実態とすることはできないのである。

上記の点から考えるならば、大内盛見による応永十四年大蔵経請求勸進は、大蔵経を請求するための勸進であったことに違いはないが、それ以上に、当主大内盛見による大蔵経請求の試みを家臣団を含めた人々に知らしめるという目的で行われたとは考えられないだろうか。そしてその際作成された勸進帳は、当主側の考える家臣団内部の秩序を、当主自らが確認すると共に、家臣団を構成する各人それぞれに認識させる効果をねらったものと考えてきよう。

当時の大内氏領国は、盛見による支配がようやく安定したとはいえ、盛見自身、当初は当主でさえなく、武力によりその座を勝ち取ったという経緯がある。また、家臣団内部は、陶・冷泉・右田など、始祖を大内氏からの分流とする血縁的な家臣を中心としつつも、鷲頭・豊田・内藤など周防・長門などの対抗

勢力や、周防国衙との関わりを有する家臣など、多様な性格をもった家臣によって構成され、組織は必ずしも盤石とはいえない状態にあった。盛見の当主までの道程も同様だが、盛見が没すると、再度大内氏は持世・持盛の二派に分かれ対立抗争を生じている。おそらく盛見にはそうした家臣団内部の抱える事情をいかに統制するのかわという課題が存在したであろう。そうしたなか、当主の氏寺である興隆寺への大蔵経請求という名目は、家臣団の内部の状況を確認し、家臣団の編成を強化するに格好の材料であったといえるのである。

さらに本勸進の性格については、今ひとつの可能性も考慮しておく必要があるように思う。それは盛見による氏寺の興隆という点である。

周知のように、大内氏の祖先譚は百済聖明王末裔の琳聖太子にその源を求め、大内氏自身積極的にその祖先譚を利用している。この大内氏の祖先譚、つまりは大内氏の先祖観については、福尾猛一郎氏、森茂暁氏の研究⁽¹⁴⁾を基礎に、近年では須田牧子氏⁽¹⁵⁾によってより詳細な議論へと発展している。その中で本稿と特に関わりがあるのは、大内氏による先祖観形成が盛見前後頃に明確化するという指摘である。須田氏によれば、大内氏による先祖観形成は、義弘・教弘の代それぞれが先祖観形成における画期とされ、義弘は自らが百済王系の出身であることを朝鮮王

朝に対し主張するが、その主張が教弘の代にはより具体化、朝鮮側にも受け入れられることにより、朝鮮側の大内氏に対する認識が同系への親和的なものへと変化するとされている。

先祖觀自体、あるいはその形成の問題についてここでは深く立ち入らないが、本稿でとりあげた勸進の行われた応永年間には先祖觀の形成期にあたる。須田氏の理解に従うならば、盛見の代は先祖觀形成における画期の間、義弘期の先祖觀が継続する時期ということになる。盛見の代の朝鮮通交について、須田氏は「大藏經および仏具の求請は主に領国内の寺院の莊嚴という性格」とされたが、権力基盤の脆弱な盛見にとつて先祖觀形成に寄与するためには、氏寺の發展が最も重要であつたことは間違いない。応永十一年、興隆寺の再建が成就し本堂供養が行われたが、それは氏寺興隆寺の外觀を、後に「大内多々良氏譜牒」が「氷上山者、神社仏樓僧坊以下十倍于鷲頭山、陟山八町有宮、東宮下宮、南向本堂、釈迦三尊、脇士四天王、四面回廊、二階樓門、東西二塔、鐘樓、輪藏并經藏⁽¹⁶⁾」等と記す如き姿へと整えることに他ならず、本堂再建に続いて行われた藏經請来はそうした氏寺整備の仕上げともいえる段階であつたといえるのである。

政治交渉と大藏經

次に、藏經の政治的な利用のうち、対幕府交渉における利用を見てみよう。

ここで取り上げる対幕府交渉における藏經の利用とは、大内氏と幕府との政治的な交渉において大藏經が大内氏側の政治的な切り札として用いられたことに他ならない。領国内に多くの藏經を藏した大内氏ならではの政治交渉のありようである。

まずは史料を見てみよう。

史料 A

興文首座語愚云、大内方大藏經十三藏持之、就中七藏者好經也、其内上々之經有一部、公方様若有御所望、先為置東府有御所望、經一兩年後、御寄進于相国可然、又有鐘、以南両鑄付梵字唐鐘也、是亦有御所望者可進之、⁽¹⁷⁾

史料 B

又問曰、藏經函數如何、答七千藏也、凡七百合許歟、今度自高麗來藏經函者、太半六十合有之、經亦皆トチ本也云々、今有全藏之所、合之太畔缺耳、又問曰、無輪藏處如何安之哉、造經藏収之、東府可被置藏經、大内所持之藏經可有御所望、若有闕典者不可被仰、有全藏者可御所望、先以内

義可尋之命有之、答曰、可尋彼雜掌云々、⁽¹⁸⁾

史料C

次遣競秀、相公藏經可有御所望之事伝其命、若藏經有缺者不可有御所望云々、興文首座云、大内所持之藏經八藏有之、皆全藏有之、不可有缺典者、喚鐘又有天竺物也、若有御所望必可令進上云々、⁽¹⁹⁾

史料D

又藏經事相尋興文首座処、大内方八藏持之、皆全備之經也、此御所後々可為僧所、然聞見求之之由、愚一行有之者、以其可白下云々、愚与大内細々不白通、自汲古方白下者可然乎之由白之、可命汲古之命有之、蓋藏經事、急上之者不可有置所見立經藏以後可上之由可命之云々、

(中略)

藏經事今日披露之、自其雖被請愚一行、愚斟酌、被命伊勢守可然由白之、内々可被得其意、藏經事有領掌者、先々可被置国、於東府可被建藏殿、々々造畢後、可被召上之命有之、其分可被相伝云々、⁽²⁰⁾

右の四点の史料は、いずれも『蔭涼軒日録』長享二(一四八八)年の記事で、史料Aが二月二十四日、史料BからDが五月

五日、九日、十三日条である。やや煩雑ではあるが、内容を時間の経過に沿ってみてみる。

まず二月二十四日に、大内氏在京雜掌興文首座より蔭涼軒主⁽²¹⁾である亀泉集証に對し、大内氏の所藏する大藏經のうち、上々のもの一部を、將軍義尚が所望であれば寄進する旨の申し入れがなされる。これに對し幕府側では五月五日になつて、藏經の具体的な函数や形態、所藏の方法などについて問答が行われた上で、欠巻が無いならば所望する旨が決められる。次いで五月九日には、興文の宿所である競秀軒に使者が遣わされ、欠巻の有無を確認し、欠巻が無いならば所望する旨が伝えられる。この時興文からは藏經に加え、併せて天竺物の喚鐘を寄進したい旨の申し入れがなされ、所望の意志確認が行われる。そして五月十三日には、興文より再度大内氏所藏の大藏經の実態について説明がなされると共に、寄進にあつて亀泉の「一行」が求められた。しかし亀泉自身は大内氏と疎遠であること、また幕府の命を蔭涼軒発給の文書によつて伝えることには問題があることから、速やかなる寄進の要請は断念し、幕府内部へ大内氏よりの藏經寄進が披露される。幕府では、亀泉の考えに従い經藏を建立し、その上で伊勢氏より所望の命を伝えることが決せられた。

以上が史料AからDの概要であるが、この一連の経緯からま

ず指摘しておきたいのは、当時大内氏領国には相当数の大蔵経が蔵されていたことが判明する点である。

史料では当初興文は、領国内の大蔵経を十三藏と主張するものの、後には八藏と述べるなど一貫性には欠けている。⁽²²⁾大内氏領国内の大蔵経の数について、室町期に確実に蔵されていたことが、史料によって確認できるのは、氷上山興隆寺・永興寺・松崎天神社・秋穂八幡宮（後に厳島大願寺へ寄進）の四藏であり、興文の主張する八藏、あるいは十三藏には遠く及ばない。もちろん興文の主張そのものも誇張を含んだものであった可能性は十分にあるとみてよい。とはいえ盛見をはじめとして大内氏各当主は、幾度も蔵経請求を行っており、史料では確認できないものの実際には領国内に複数の大蔵経が存在していた可能性は否定できない。ただ、いずれにせよ、当時幕府を含めても複数の大蔵経を所持していた地域権力は他にはなく、複数の蔵経を所持しているという事実には十分な説得力を持ったことは確実であろう。

そこで当然問題となるのは、興文による蔵経寄進の申し入れが如何なる理由によってなされたのかである。

幕府の蔵経は、史料Bに「合之太畔缺耳」とあるように、全備のものが無かったことは事実だったのであろう。寄進の申し出をうけた亀泉が、興文の示した蔵経に関して「闕典」に関心

を抱き、何度も質問を繰り返しているのはこのためと思われる。ならば、大内氏側の寄進の申し出は、幕府のこうした事情を考慮したものであったのであろうか。

大内氏から蔵経寄進の申し出があった前後の『蔭涼軒日録』を見てみると、史料Bでは蔵経寄進の申し出に続いて、亀泉からは「三合船之勘合、来七日擇日条、先一枚可渡之」と述べられており、七日には確かに勘合が下付されている。興文よりの蔵経寄進は、幕府の遣明使節計画との関係で持ち出された可能性が高いのである。

とはいえ、次回遣明使節が派遣されるのは明応四年（一四九五）のことであり、ここでの勘合下付から八年も後のことである。しかし遣明使節の派遣は、計画から実行まで通常一〇年前後程度を要することが多く、幕府内部では次期遣明使節の準備は着々と進められつつあった。史料Aと同日の長享二年二月二十四日条では、次期遣明使節の陣容が定められ、

渡唐船諸役者、正使仲璋和尚、副使梵初西堂、居座興文首座、陳外郎、

と決せられていた。そして三月十一日には、正使・副使および居座の一名が、幕府による打診の結果、既に使節への参加を了承しており、使節メンバーの人選で唯一残されていたのは、もう一名の居座のみという状況であった。

こうしたなか、大内氏側は、幕府による興文の居座承諾を拒み続ける一方で、藏経寄進の話題を幕府に持ちかけているのである。

結局、興文の居座としての遣明使節への参加は、三月十六日条に「居座事雖応台命、必可違太守命、然者為公私不可然、縦及出奔可令峻拒、以此旨達台聽可為素望⁽²⁷⁾」とあるように、興文が自らの出奔を引き合いに出してまで厳格に拒否し、幕府の計画は頓挫せざるをえなかった。興文がこれほどまでに居座就任を強固に否定した理由は、興文自身の理由ではなく、「必可違太守命」というものであり、当主大内政弘の強い意向によつてであつた。そして、その大内政弘の意向とは、幕府による遣明使節の人選そのものに対する不満であり、それは翌十七日に「正使副使其仁体不足也、横川可然之由申之⁽²⁸⁾」とあることによつて判明する。

すなわち大内氏側は、二月二十四日条において明らかとなつた遣明使節のメンバーに、明らかに不満を抱いており、遣明正使への横川景三の就任を要求するのである。

そもそも、藏経を寄進するのであれば、幕府と五山の関係を考えれば、寄進された藏経が五山のいずれかに安置されることは当然想定されるであらう。しかし大内氏側は「被置東府、乃可令進上、若為置他所有御所望者、不可領掌申⁽²⁹⁾」として、寄進

の際の条件として幕府への安置を要求している。実際申し出を行つている興文とて、幕府に経蔵があるか否かは当然知つているはずであり、経蔵の無い幕府への安置を要求すること自体、藏経寄進を利用した政治的交渉の意味合いが強いものであつたといえる。幕府遣明使節計画の初期において、大内氏がいかに主導権を握るか、いわばその道具として藏経は利用されているのである。

おわりに

以上、藏経をめぐる政治的な動向を、領国の統治、幕府との交渉という二つの点から検討してみた。両者は室町期の地域権力にとつて最も重視すべき政治的な課題であつた。大内氏は、藏経を氏寺と結びつけることにより、家臣団に対し統合の象徴を確固たるものとする一方で、幕府に対しては大藏経の寄進という、当該期の武家権力が心惹かれる話題を提供することにより、対幕府交渉を有利に展開しようとしていた。こうした大内氏の政治手法は、いうまでもなく複数の大藏経を所持しているという、幕府や他の地域権力にはない強みに基づくものであり、藏経を所蔵する大内氏自身がその強みを十分に認識することにより可能となつたものであつた。

ところで、本稿において大藏経をめぐる政治的な動向をとらえようとしたのは、従来の大藏経研究、とりわけ高麗版大藏経請来の研究において、經典の請来を仏教史的側面にのみ限定した理解への疑問からであった。本稿の検討により従来にはない大藏経の利用の形態がある程度は明らかにしえたと思えるが、請来の主体となつた幕府や大名達が如何なる概念でもつて藏経に接したのか、さらにいえばどのような理由によつて高麗版大藏経の輸入に執心したのかという問題は依然未解決のままである。

単なる輸入品とも異なる一方、宗教的・思想的理由のみによる輸入でもない。室町期の武家層がこぞつて執着した高麗版大藏経の輸入について、多様な側面を考慮した上での検討が必要である。

ところで、大内氏は「大内版」でも知られるように多くの出版をも手がけている。応永六年（一三九九）には「五部大乗経」が、同十七年（一四一〇）には「藏乘法数」が、また文明十四年（一四八二）以降は興隆寺で「法華経」が開版されているし、明応二年（一四九三）には「聚分韻略」が、また明応八年には「論語集解」が開版され、そして天文年間には再度『聚分韻略』が開かれている。大内氏当主は特定の当主に偏ることなく、盛見以降のほとんどの当主が歴代毎に開版に何らかの関

わりを有しているのがわかる。こうした開版事業については、藏経請来と同様、これまた当主の個人的な信仰心の産物とされることが多いが、藏経請来・開版事業両者を併せて考える時、そこには異常とも思えるほどの經典への傾倒がうかがえるのである。今後大内氏の有した宗教性・思想性、さらにはそうした性格に基づいた政治のありようを総合的に考える必要がある。

註

- (1) 小田幹治郎「内地に渡れる高麗版大藏経」(『朝鮮』三月号、一九二一年)、今村頼「足利氏と朝鮮の大藏経板」(『朝鮮』十一月号、一九三〇年)、堀池春峰「中世・日鮮交渉と高麗版藏経—大和・円成寺栄弘と増上寺高麗版—」(『史林』四三卷六号、一九六〇年)、丸亀金作「高麗の大藏経と越後安国寺について」(『朝鮮学報』第三七・三八輯、一九六五年)、中村栄弘「嚴島大願寺尊海の朝鮮紀行」(同『日鮮関係史の研究』上、吉川弘文館、一九六五年)、田村洋幸「中世日朝貿易の研究」(三和書房、一九六七年)など。
- (2) 丸亀金作前掲註(1)論文。
- (3) 拙稿「中世後期における地域権力の対外交渉と寺院—交渉実務を中心に—」(『佛教大学総合研究所紀要』宗教と政治、一九九八年)参照。
- (4) 田村洋幸「中世芸備地方の対鮮通交」(『芸備地方史研究』三五号、一九五〇年、後に田村氏前掲註(1)書に所収)。
- (5) 「氷上山興隆寺一切経藏供養条々」(『萩藩閥閥録』四卷「氷上山興隆寺文書」九号)。以下同文書よりの引用は、「興隆寺文

書」と略し号数のみをあげる。

- (6) 『大内氏実録』(マツノ書店、一九七四年) 応永十一年の項。
- (7) 『興隆寺一切経勸進帳』(『興隆寺文書』一八号)。本勸進帳は、『萩藩閥閥録』四巻の他、『防長風土注進案』山口宰判興隆寺の項にも所収されている。ただ両者では未進の記述、合点の記述に多少の相違が見られる。
- (8) 『周防国吏務代々過現名帳』(『山口県史』史料編中世一、一九九八年)。
- (9) 御園生翁甫『大内氏史研究』(マツノ書店、一九五九年) 三五八頁「盛見時代の大内氏家中」。
- (10) 前掲註(9)において、御園生翁甫氏によって勸進帳に見える大内氏家臣については比較的詳細な分析も行われている。ただ御園生氏はこの合点および未進の記述については全く触れておらず、勸進帳と家臣団との関係は合点および未進の記載を考慮する必要があると考える。
- (11) 『防長風土注進案』一二巻山口宰判「御堀村」の項(同書一三三三頁)。
- (12) 「正任記」文明十年十月二日条(前掲註(8)『山口県史』所収)。
- (13) 観世音寺の奉加帳への大内政弘の加判については、拙稿「地域権力と寺社―陣所を訪ねる人々―」(伊藤唯真編『日本仏教の形成と展開』法蔵館、二〇〇二年)を参照されたい。
- (14) 福尾猛市郎『大内義隆』(吉川弘文館、一九五九年)、森茂暁「周防大内氏の渡来伝承について―『鹿苑院西国下向記』を素材として―」(『政治経済史学』三六二号、一九九六年)。
- (15) 須田牧子「室町期における大内氏の対朝関係と先祖観の形成」(『歴史学研究』七六一号、二〇〇二年)。

- (16) 「大内多々良氏牒譜」(『続群書類従』七輯「大内系図」) 所収。
- (17) 『蔭涼軒日録』(続史料大成、臨川書店、一九七八年) 三卷一〇三頁。
- (18) 前掲書、三卷一五一頁。
- (19) 前掲書、三卷一五七頁。
- (20) 前掲書、三卷一五九頁。
- (21) 在京雑掌東周興文については、拙稿「地域権力の雑掌僧とその活動―大内氏の対幕府政策と興文首座―」(『鷹陵史学』二五号、一九九九年)を参照されたい。
- (22) 興文が主張を改めた理由としては次のような点が考えられる。当初興文は、十三歳のうち七歳が好経であることを強調し、それを幕府側に示したものの、亀泉の関心が好経か否かではなく、全備か否かにあったことから、領国内全備の数を述べる形へと改めたためである。
- (23) 永興寺「与朝鮮国議政左右政丞書」(『不二遺稿』上村観光編『五山文学全集』第三輯)、『萩藩閥閥録』松崎天満宮社、「尊海渡海状」(『広島県史』古代中世史料編)。
- (24) 前掲註(18)に同じ。
- (25) 前掲註(3) 拙稿参照。
- (26) 『蔭涼軒日録』前掲書、三卷一〇三頁。
- (27) 『蔭涼軒日録』前掲書、三卷一五五頁。
- (28) 『蔭涼軒日録』前掲書、三卷一六頁。